

くすのき

KUSUNOKI

2022.2 148号



特集1 兵庫県建築士事務所協会のあゆみ

兵庫県建築士事務所協会の歩み

兵庫県建築4団体連携推進組織立ち上げの経緯

特集2 震災二十七目の知られざる歴史的邸宅

一大正期・安藤新太郎邸と昭和初期・畑政七邸

特集3 神戸市の文化遺産としての神戸洋家具の過去・現在・未来

神戸洋家具に関する今後の展開について

神戸の洋家具の現状を憂える

地域の文化資源としての「神戸洋家具」の歴史概要と事例

特集4 設計事務所のアタラシイカタチ…設計組織COCOAの場合

COCOAという共創する界限



一般社団法人 兵庫県建築士事務所協会

特集③ |

神戸洋家具に関する 今後の展開について

兵庫県建築士事務所協会 広報渉外部長 鈴木 祐一

これまで、兵庫県建築士事務所協会において、いくつかのシンポジウムを主催してきました。基本的には当会が地域社会とツナガル市民講座的な内容で計画してまいりました。今回は明治初期に神戸において発祥し、明治・大正・昭和・平成と産業として成長してきた神戸洋家具産業の過程を振り返りながら令和の現在においてどのような現状にあるのかを改めて学習したいと考えました。

ただ単に地域の産業遺産的な見方ではなく、今後変革を通して新しい地域産業として発展する可能性も十分秘めていると考えます。そこで神戸洋家具について研究をされている、神戸芸術工科大学、佐野浩三先生に神戸洋家具の成長期のお話を特集記事としてまとめていただきました。また令和4年秋頃には、そのシンポジウムも開催することになりました。当会の会員のみならず、多彩な分野の方々の参加を期待しています。

神戸の洋家具の現状を憂える

藤井 光造

兵庫県家具組合連合会会長

経歴

株式会社クレアシオンフジ / 株式会社藤井正商店 代表取締役
1948年神戸生まれ。1970年同志社大学商学部卒業。
1970年から3年フランスへ留学し、アールヌーボ、アール
デコ期の家具について学ぶ。帰国後1974年、父が経営する
家具製造会社に入社し現在に至る。兵庫県家具組合
連合会会長。



神戸の洋家具の技法・技術は一世に亘る様々な歴史を越えて、今に生き続けています。

一つ一つが妥協を許さない生粋の洋家具職人達の磨き上げたハンドメイドです。そこには確かな人間の技と、良材厳選から乾燥、木工、塗装、検品まで一貫して見守る厳しい目があります。また使用される檜木は、きめが細かく、強固で狂いが少なく、しかも刃物を入れたときに粘りがあります。数多くある家具材の中でも湿気の多い日本の風土に対して、理想的ともいえる素材なのです。この檜木を2年以上も自然乾燥させて歪みや水分を除き、次に人工乾燥で矯正しながら水分を6%まで落とします。さらに15日ほど置いた後、水分を10%の最良値に上げやと加工に入ります。だから長く使っても木素材の狂いがなく、虫もつきにくくなります。これを駆使して、材料・寸法・色調を決定し、さらに何年も何年も修行に修行を重ねた優秀な職人によって様々なニーズにお応えするオーダーメイド家具が出来上がります。

しかしながら現在の神戸の洋家具業界は、かつては日本一と隆盛を誇っていたものの、今や風前の灯火状態であります。店舗数、職人とも、激減の一途です。そもそも神戸の洋家具は地場産業であり異人館から培われたスタイル、様式、技術、何をおいても日本の最たるものでおおいに顧客を満足させたものでした。過去を振り返っても何一つ明るい未来は望めません。これからは神戸洋家具組合の会長として、こうなったらいいのになあと思う思いを述べさせていただきます。

まず我々は家具業界において新しい時代に受け入れられず、古色蒼然とした道具屋にしかすぎず、木というものは鉄やコンクリートの無機質と違った優しさ温もりを感じ健康に良いというアピールする発想すらない非常に稚拙な業界であります。現代人にとってライフスタイルに家具がどう関わって行くか、愛着や親近感を持っていかにか重要なものか考え直していただきたいものです。

しかしながらここにもう一つの問題点があります。価格の問題です。入手し易い安い家具と、入手し難い高価な家具があります。言い換えれば不要になれば粗ごみ置き場に直行する使い捨て家具と、伝承家具とに分類してもいいかと思います。この使い分けも我々のライフスタイルにおいて由々しき問題になろうかと思われます。

私はかつてヨーロッパ滞在中にフランス・オランダ・ドイツはもちろんのこと、ポーランドのご家庭にお邪魔してお国柄や文化の違いを体験し驚愕したことを憶えております。私が訪れたご家庭というのは必ずしもそんなに裕福な家庭ばかりでなく、全般的には中流以上の生活者であったと思います。どのご家庭でもインテリアの勉強に來ていると言うと、決まって自慢の家具の話が出てきます。実感したのはどこのご家庭も相当古い家具をお持ちで、しかもその家具は古いだけではなく、重厚な存在感が漂い、そのご家庭の物語があり、歴史が伝わってくるのです。どのご家庭にも一つや二つはあります。決して生活レベルは高くなく、むしろ我々より低いくらいですが、生き方にゆとりがあり心の豊かさを感じ取ることが出来ます。これはヨーロッパの文化なのでしょう。社会における私的な資本・文化の蓄積の差が日本とヨーロッパとでは違うのでしょうか？

もう一つの見方を考察すると、日本の文化経済で電気製品や車など産業機器の素晴らしい発展があります。各家庭では、テレビや車、食料品等あらゆる物資が氾濫しています。一方ヨーロッパではそんな物に価値観を見出しておりません。戦後日本の投資は使い捨ての物ばかりで経済を回して来たのではないのでしょうか。戦後何十年かはこれで良かったのでしょうか。しかし今や建築までもが、パンフレットを見て注文し建てるのではなく、家具や電気製品と同様、使い捨てを前提に買うという形態になってきたような気がいたします。そろそろこの辺で我々も使い捨て文明の尊厳を守りつつ、注文建築・伝承家具である神戸洋家具の市民権が復興する時代が来てもいいのではないのでしょうか。我が国も欧米同様、文化的で多様性の豊かなライフスタイルを実現できるように願います。

地域の文化資源としての「神戸洋家具」の歴史概要と事例

佐野 浩三

神戸芸術工科大学 教授

経歴

神戸芸術工科大学 大学院/プロダクト・インテリアデザイン学科教授
1960年生。京都工芸繊維大学大学院修士課程修了。博士(芸術工学)/工学修士。建築事務所勤務を経てデザイン事務所設立後、神戸芸術工科大学入職。専門はインテリアデザイン。2004年から神戸洋家具産業についての研究を継続している。現在の研究テーマは、「バナキュラーデザイン」。



1 はじめに

神戸の洋家具産業は、慶応3(1868)年の兵庫(神戸)開港に伴う居留地や雑居地で外国人から依頼された洋家具の修理や再生販売の実用的需要を契機として発祥した。安政6(1859)年に開港した横浜も同様に、市井にある人々の活動の現場から洋家具産業が生まれた経緯を持っている。

一方、開港地での実用的需要の系譜に対して、「東京芝家具」や宮内庁の室内装飾を担当した東京京橋の「小林装飾店」(小林義雄)は、政治的需要を背景にして成立した洋家具産業の中心的系譜である。

神戸の洋家具産業は西日本の近代化における建築空間の洋風化を支える基盤を早くから確立していた。そして、明治初期に創業し現代に至る約150年の間、途切れることなく家具製作を継承している事業者を有する希有な系譜である。行政主導の技術移植ではなく、開港にはじまる市井の需要から発祥し産業化に至る自然発生的なデザイン事象の事例である。

しかし、神戸洋家具産業はこれまでに専門の家具・室内意匠研究でもその詳細が扱われておらず、第二次世界大戦や阪神淡路大震災によって第二次世界大戦以前の歴史的な資料が消失した。今日に残されている記録や事例は限られており、産業

の実態が実証的、系統的に纏められた研究事例は乏しい。

各時代の社会の要請に応えながら顧客と一体となって造られ、世代を超えて長年受け継がれてきた神戸洋家具は「神戸らしさ」や「神戸スタイル」を形づくる重要な構成要素であるが、現状では存続の危機にある。神戸の洋家具は、時代や事業者によって多様な形態や装飾があり統一された定義は存在しておらず、呼称についても多様な表現が使用されているが、本稿では『新修 神戸市史』(平成12年)の記載に準じ、近代型地場産業の神戸の洋家具を「神戸洋家具」と表記する。

2 時代区分と概要

本項では、開港期から昭和後期までの約120年間の歴史を6期に区分し各期の概要を紹介する。

2-1「発祥期」:開港から明治20年代初期(1868-1889頃)

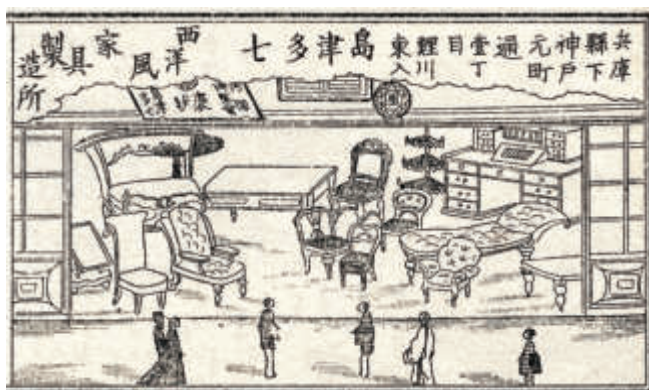
「発祥期」は、開港後の明治初期から明治22(1889)年に大日本帝国憲法が公布され、神戸市が誕生した20年代前期までを対象とする。

産業発祥の契機は居留地や雑居地の外国人との交流で本

洋家具製造所と販売の様子 出典:明治15年刊行『豪商神兵庫の魁』



木本悦治郎「西洋大工業」 三宮横町



島津多七「西洋風家具製造所」 元町通一丁目



天池徳兵衛の椅子、神戸市立博物館収蔵
「明治十八年七月十七日、神戸福原町天池徳兵衛」



明治39(1906)年 永田良介商店前での二代目良介の襲名記念写真
写真内右の家具は英国へ輸出するカップボード(永田良介商店提供)

来の仕事以外の依頼に応じたことが起点となる。当時の外国人にとって椅子座の生活様式を持たない日本に赴任する際に持込んだ家具の修理や不足品の入手、および帰国・異動に伴う家具の処分は対処に窮する問題であった。洋家具の修理を依頼された船大工や家財道具一式の引取、不足品の入手を依頼された道具商が神戸洋家具産業発祥の先駆者であり、その後も業界を牽引する事業者となる。香川県塩飽諸島出身で明治初期に製作所を設け船大工から転業した眞木徳助の「眞木製作所」(明治8年創業:「メープル不二屋」がその系統を汲む)と岐阜出身の永田良助の道具商「永田良介商店」(明治5年創業)が、事業者として今日までの流れを築き繋いでいる代表的な二系統である。本稿ではこの2系統を中心に紹介する。

先駆者たちが家具製作を事業とするようになる経緯は、外国人の直接的な依頼に対して限られた手持ちの能力による試行錯誤の繰り返しの模倣製作であった。発祥期は、客観的に「事業者の総合体」として認識される産業の成立までには至っていないが、統計名簿や図版の掲載等から先駆者3件と初期参入者12件の少なくとも15件の洋家具を扱う事業者が存在していることから、洋家具の市場と産業の枠組みが形成される過渡期にある。

2-2「成長期」:明治20年代中頃から末期(1890-1911頃)

「成長期」は、神戸市行政(明治22年)となった明治中期から「神戸市西洋家具商組合」(明治42年)が結成された明治末期までとする。

代表的な先駆者の眞木と永田は、製造事業者としては早くから『日本紳士録』や『神戸市要鑑』にも掲載され、成長期以降においても神戸洋家具産業を牽引している事業者である。成長期には、「製造卸売」と「仕入販売」を専門の業態とする新規事

業者が増加したことで、生産と販売の事業連携が統合された産業が成立している。「製造技術」は、眞木製作所などを中心に工場が新設され組織化された職人網が形成された。明治末期には、客観的に認識できる規模と組織網を備えた洋家具産業が神戸に定着している。

神戸洋家具産業の知名度は全国的になり、一部の事業者は欧州への輸出も果たしていた。当時の貴重な写真の永田の看板には、製造販売「西洋家具・欧米雑貨・室内装飾」とあり、幅広い営業内容であることが理解できる。英国に輸出するカップボードは、ルネサンスやジャコビアンスタイルを基調とした折衷様式でビクトリア期の典型的なリバイバルの造形手法である。他の家具も多様な様式を復活させ折衷した当時の英国の事情を反映している。写真で見る限りは技術的の一連の工程を高い水準でこなしていることが推測できる。一方、多様化する洋家具の需要に応えるために「造形技術」(デザイン)の獲得が課題となっていた。

成長期には複数の統計名簿等の調査から28件の新規事業者の掲載が確認できるため、少なくとも37件の洋家具を専業とする事業者が存在していた。

2-3「変革期」:大正期(1912-1926頃)

「変革期」は造船・海運景気による経済発展や生活改善の意識が高まる大正時代を対象とする。

洋風の生活様式の普及により、神戸洋家具産業の取引先は国内の大都市圏を中心に地方や海外にも販路が拡大している。神戸圏においても洋風建築が急激に増加し、洋家具の需要が伸びる状況にあった。

先駆者たちは、市場需要の多様化に対処するために京都高等工芸学校やヴォーリズ建築事務所を通じて専門知識と造形

手法を吸収し、産業の生産領域は図案(設計士)と製造(職人)の二つの技術(職域)が連携して創造的な製作を可能にする工程に再編成された。船舶機装への参入とともに、F・L・ライトや遠藤新らの独創的な家具の製作にも対応していた。

複数の統計名簿等の調査からは、81件の新規事業者の掲載があり、少なくとも113件の事業者が稼働していたことが判明した。

2-4「成熟期」:第二次世界大戦までの昭和前期(1927-1941頃)

「成熟期」は、昭和2(1927)年の金融大恐慌による経済状況の節目を期の開始とし、昭和13(1938)年の阪神大水害と国家総動員法の戦時統制によって事業の制限が始まり、統計資料等でも調査が困難となる昭和16(1941)年頃迄とする。

成熟期の神戸圏の重要な社会背景は、鉄道会社を中心として開発された郊外住宅地に有産階級の邸宅が集積することである。鉄道会社が多種多様な文化娯楽施設を建設するとともに、居住者自らも病院や学校を開設し充実した生活環境が整えられていた。この郊外住宅地では国際的な神戸の洋風文化と大阪の伝統文化が併存し、西洋式の生活様式を取り入れながらも伝統的な価値観を尊重する独特な生活意識を持った地域文化が形成され、神戸洋家具産業も文化形成の一翼を担っている。

統計名簿には、変革期までの高額納税者に相当する事業者が少なくとも131件掲載され、掲載条件外の業者も多く存在していた。神戸洋家具産業全体の生産額は変革期から4倍以上に伸張し急激に市場が拡大している。眞木製作所はヴォーリズ建築事務所との関係を継続しながら最盛期を迎えているが、昭和15年頃に直系の後継者が途絶え、昭和15(1940)年に独立した不二屋の吉田友一等の職人達に引き継がれることになる。

2-5「復興期」:終戦直後から昭和20年代末(1945-1954頃)

戦後は終戦から昭和28(1953)年の国民総生産が戦前の水準に回復する頃までを「復興期」とする。神戸洋家具産業においても昭和28(1953)年には民需家具の生産が回復しはじめ新作家具発表展示会が開催されており、有志が木材科学協同組合を結成した昭和29(1954)年頃を変節点とする。

神戸圏は、昭和20(1945)年の大空襲によって大半が焦土と化し、戦争終了時の工業生産能力は、壊滅状態であった。神戸洋家具産業の戦後の再出発は他産地と同様に、連合軍家族用住宅用家具の生産割り当てによる特需が起点となった。産業の復興には他所の洋家具産業が連合軍用家具の生産方式に沿った量産型既製家具の技術を取り入れたのに対して、神戸洋家具産業は戦前の手作業中心で少量受注生産の技術を継承し、開国以来の伝統を受け継ぐ対面営業による受注高級家具

として再出発した。

2-6「競争期」:昭和30年代から昭和末期(1955-1985頃)

経済状態の回復以降は、昭和30年代から変動相場制に移行する昭和48年(1955-1973)までの高度経済成長期とそれに続く昭和49年から昭和末期頃(1974-1985プラザ合意・バブル期前)までの安定成長期を併せて「競争期」(昭和30年代から昭和末期)とする。

戦後の神戸洋家具産業は、戦前からの伝統を継承する事業者と量産技術や現代的な様式を取り入れた事業者が混在する状況となり、戦前の同じ指向性を持った事業者の集合体であった状況からは大きく変容している。高度経済成長期以降は拡大する洋家具市場の競争的状況に対応するために、生産の効率化や欧州の模倣製作を主とする経営的な判断による視点が中心になっている。量産型既製家具との競争的局面が顕在化するに従い市場需要を想定した見込生産のための効率的な商品仕様が優勢となる。

高度経済成長を背景に高級家具需要や海外輸出が拡大することで神戸洋家具産業も発展し、業界の約1/3の洋家具企業38社が工場の集団化による生産の合理化や労働環境の改善を図り、昭和40(1965)年に協同組合神戸木工センター(垂水区小束山)を結成した。戦後昭和期の神戸洋家具関連の事業者数は100件前後であり、戦前の業態を踏襲した店舗を構える事業者は10数件程度で推移していた。

3 地域の文化資源としての「神戸洋家具」

戦前の神戸の洋家具は西欧の歴史様式を基調にしながらも、日本の生活環境や風土に適応した進展を遂げ、経済の発達と共に「阪神間モダニズム」に代表される文化形成の一翼を担ってきた。彫刻による装飾的な意匠が印象的であるが、戦後の高度成長期には実用的な高級欧風家具として一般家庭にも広く浸透した。神戸の洋家具は、各時代の多様な社会の要請に応えながら世代を超えて長年受け継がれ、「神戸らしさ」や「神戸スタイル」を形づくる重要な構成要素となり、その基盤の成立は明治後期から昭和初期であった。

3-1「成長期」明治後半の社会背景と事業者の実態

成長期後半には、明治政府の教育面での施策にも洋家具や室内装飾に関連する新たな動向が現れている。明治29(1896)年には東京美術学校に図按科、明治32(1899)年には東京工業学校(1901東京高等工業学校)に工業図按科が設置され、明治35(1902)年に工芸を専門とする初めての高等教育機関である京都高等工芸学校の図按科が誕生した。設計や製図を

意味する「図按」を掲げたこれらの教育機関は、「美術」と一線を画した消費財の生産や生産物を意味する「工芸」を研究領域として日本における意匠・図案（デザイン）教育を開始し、洋家具や室内装飾の専門家が養成された。

一般市場においても、明治33(1900)年には高島屋大阪店に家具係が設けられ、明治37(1904)年には三越百貨店も洋家具販売を開始し、これ以降、洋家具売場は他の百貨店にも普及することになる。外国人住宅や公共施設、商館などの需要に加えて、一般の富裕層にも市場が拡張しつつあった。

「眞木製作所」は徳助の弟の新造が明治39年には製作現場の「親方」であり、組織の代表者でもあった。新造の職人技術は「大変優秀であり、得心がいく家具を製作するために製作工程[木地、削(く)り、彫刻、塗装、組立、張り等]すべてを一人でこなして、弟子の中には名人級の人がたくさんいた」(職人で後に不二屋の創業に参画する吉田岩夫の手記)と伝えられている。明治後期には工場が新設され塩飽出身の職人集団が形成されていた。

「永田良介商店」は、明治35(1902)年に元町のテーラーの職人であった飯島千和宜(ちわき)が良助の長女と結婚し、明治39(1906)年に二代目永田良介を襲名している。二代目良介は、後に議員などの公職に就くが、経営者としても先見の明があり、置家具だけでなく造作家具や階段、建具、カーテン、カーペット、照明器具を含む室内装飾全般を扱い、官公庁や商家からの総合的な室内装飾の依頼を中心に販路を拡張し、輸出も手がけ事業を拡大していた。

詳細は不明であるが、明治35(1902)年に官立神戸高等商業学校(現神戸大学)創立時の室内装飾を請け負った際には、一部の家具の製作を眞木製作所に依頼したと永田良介商店には伝承されており、物件の規模によっては地域の組織網を活用して対応することが常態であったことが類推できる。

3-2 「変革期」大正期の社会背景と事業者の実態

変革期には、大正4(1915)年の第一次世界大戦景気も影響

し、神戸の洋風建築は明治32(1899)年の居留地返還以降、明治42(1909)年の366軒から大正7(1918)年の10年間に555軒にまで増加し、神戸市内においても洋家具の需要が伸びる状況にあった。大戦景気は全国に及ぶが、特に神戸洋家具産業においては、その後も大正7(1918)年の造船・海運景気をピークに、大正12(1923)年の関東大震災で商社や領事館が横浜から神戸へ移転され、多くの外国人が移住してきたこと、新しい富裕層の洋風建築の採用、そして生活改善運動の気運による全国各地での洋家具展示会開催など、洋家具需要に有利な社会情勢となっていた。

眞木製作所は、眞木徳助の弟の新造を中心に明治期から基盤を固め、多くの塩飽出身者の職人を養成していた。経営面では新造の娘婿の山本久雄が才覚を発揮し、大正7(1918)年に経営を引き継ぎ会社組織化した。吉田岩夫の手記には「(久雄は)外交の上手な人で北野町の外国人、日本中から阪神間に集ってきたブルジョア階級との交際を広めその家庭の家具装飾を幅広く請負い製作しました。当時、神戸に建築事務所を持っていたヴォーリスさん[ママ]が九州から北海道までゴシックの教会様式建築を設計して、それらの内部の家具装飾を眞木が請負い製作しました。このヴォーリス建築事務所から眞木が学んだ洋家具の知識は大きなものがありました。」と記されている。

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ(1880-1964)と共に「ヴォーリズ合名会社」を設立した吉田悦蔵(1890-1941:神戸の油問屋に生まれ滋賀県立商業学校に内地留学)の近江八幡市の自邸(大正2・1913年)に残る当時の洋家具は一般住宅用の貴重な現存事例である。ヴォーリズは全国に200棟近い建物を設計し、近江八幡市には30棟弱が現存しているが、そのなかでも吉田邸は、もっとも初期の個人住宅であり、国の登録有形文化財に登録されている。

吉田邸建設当時の家具は、「ヴォーリズが関わることはなく、悦蔵自身が出身地の神戸から職人を呼び寄せて誂えさせた」(吉田畠氏からの聞き取り)と伝えられている。明治初期から日



大正2(1913)年 吉田邸竣工当時の家具(撮影:筆者 2002)



大正9年(1920)年頃のアームチェア
永田良介商店所蔵 (撮影:筆者 2002)

本の洋家具は、歴史的な折衷様式の意匠が主流であるが、吉田邸建設時の家具には当時先端の脱歴史様式であるセセッションスタイルのシリーズ家具がある。一般住宅の日常空間で実用性の高い良質の家具であり、製作事業者はヨーロッパの家具意匠や考え方の先端情報を得られる環境を備えていることが理解できる。製造者の直接的な記録は残っていないが、真木製作所である可能性が極めて高い。(詳細は参考論文を参照)

大正期に入り永田良介商店は同業の河南商店と協同で大手造船所の船舶艤装に本格的に参入した。艤装の関連から社主の自邸の家具や室内装飾を扱う事例もあり、大正6(1917)年に日下部汽船を創業した日下部久太郎の邸宅(大正8年、現在の舞子ホテル)の家具を請け負っている。

家具単品が特定できる事例としては、稲岡家(稲岡工業・イカリタオル:1891-2012)に大正9年(1920)年頃に永田が納品し

た肘掛椅子がある。座面シートは張替えているが木部は当時のまま残されている。ジャコビアンスタイル基調で緻密な彫刻が施され、実用面を考慮して装飾を押さえた意匠である。

F・L・ライト(1867-1959)の基本設計で、遠藤新(1889-1951)らが実施設計を担当した桜正宗社長山邑太左衛門の別邸竣工時の家具は永田が請け負い、1924(大正13)年に竣工した。旧山邑邸は、大正時代の建造物として、また鉄筋コンクリート建造物としても初めて昭和49(1974)年に国の重要文化財に指定された建築であり、平成元(1989)年からヨドコウ迎賓館として一般公開されている。竣工当時の家具は昭和10年の建物の売却時以降、山邑家で別途保管されていたが、阪神・淡路大震災で廃棄処分となった。一般公開以降は、竣工時とは異なる家具が配置されているが、2014年に竣工当時のデスクと椅子が復元された。(井上祐一氏作成の実測図と写真を資料に永田良介商店と関連工場で復元製作)

3-3「成熟期」の社会背景と事業者の実態

昭和初期は、昭和2(1927)年の金融大恐慌で大手総合商社「鈴木商店」と関連会社の多くが倒産し、本拠地の神戸の経済は低迷していた。さらに昭和4(1929)年の世界恐慌で、神戸市でも不況が深刻化していたが、軍需産業や民需の拡大に支えられていた洋家具産業は、回復も早く比較的影響は少なかった。



旧山邑邸の復元された家具(永田良介商店提供)、建物外観(撮影:筆者 2014)



た。翌年には、軍需関連の輸出の活況から全国的に景気は回復し始め、神戸の洋家具産業も昭和11(1936)年前後を戦前のピークとして成熟期を迎えている。

また、この期の神戸圏の生活環境は、今日では「阪神間モダニズム」として認識されている地域文化の形成を中心として特徴的な展開を遂げている。明治中期からの急激な産業発展により神戸と大阪の都市部の住環境が悪化したため、明治30年代中頃から阪神間の自然環境に恵まれた郊外に財界人の流入が始まっていた。

港湾都市の神戸と商業都市の大阪の間は、明治7(1874)年に官営鉄道(現JR)が敷設されていたが、明治38(1905)年には海側に私鉄の阪神電気鉄道(神戸三宮―大阪出入橋)、明治43(1910)年には箕面有馬電気軌道(現阪急電鉄／梅田―宝塚)が開通し、明治の末期から鉄道会社を中心となって阪神間の兵庫県域で郊外住宅地の開発が進行していた。大正9(1920)年には阪神急行電鉄(現阪急電鉄／神戸上筒井―梅田)が官営鉄道の山側に開通した。阪神間には3本の鉄道が併走することになり、鉄道会社が洋風の応接間を備えた「文化住宅」の提供を開始し、郊外型生活の付加価値面での環境基盤として遊園地、水族館、スポーツ施設、劇場、美術館、ホテルなどの多種多様な文化娯楽施設を積極的に建設するとともに、沿線の開発は急速に進展した。また、有産階級の居住者自らも私立の病院や学校を開設し、充実した生活環境が整えられていった。特に、大正12(1923)年の関東大震災以降は、神戸港での荷揚げと外国人の移住が増加したばかりでなく、文化人の来往・居住や会社機能の移転による財界人の流入も増大した。この地域文化形成において、建築やファッション、芸術と同様に洋家具や室内装飾も大きな役割を担い成果を残した。同様の郊外住宅地開発は明治43(1910)年の兵庫電気軌道(現山陽電気鉄道)の開通で神戸西部の須磨や垂水にも及んでいた。

この新しい郊外住宅地では、国際的な神戸の洋風文化と歴

史的な大阪の伝統文化が併存し、西洋式の生活様式を取り入れながらも伝統的な価値観を尊重する地域文化が熟成されていた。この「革新」と「保守」が渾然となった「阪神間モダニズム」の生活意識は今日にも受け継がれており、後発の田園調布などの住宅地開発にも影響を及ぼした。この動向は昭和初期から昭和12年頃をピークとして、阪神間の大水害と戦時体制の統制が始まる昭和13(1938)年頃まで続いていた。

昭和5(1930)年には京都高等工芸学校の卒業生で永田良介商店3代目店主の善従が、私費でドイツのパウハウスやスウェーデンを中心に欧州の家具事情を半年間かけて視察した。当初の渡欧目的であった構成主義的な歴史様式を脱した新しい「日本住宅向き西洋家具」の意匠は、当時の日本の顧客に受け入れられるには時代的に早すぎたが、西欧の歴史様式を基調にしながら日本の使用環境を考慮して歴史様式とモダンデザインの間に位置する意匠の簡素化と小型化を図った西洋家具を創出した。善従の帰国後は竹中工務店との協働が多く、ジェームス邸(昭和9・1934)、雲仙観光ホテル(昭和10・1935)、乾邸(昭和11・1936)が、今日では文化財に指定されている代表的な事例である。

真木製作所の具体的な事例は不明であるが、ヴォーリズ建築の室内装飾と家具製作を中心として、住宅の他、学校や教会、ホテル、三菱重工・川崎重工の船舶機装などの広い領域で高度な製作を請け負い知名度は高かった。

両者とも独自の試行で業界を牽引し、産業全体が高い技術力と市場での提供能力を持つことで神戸圏の生活意識や地域文化の象徴的な形象として顧客の精神面での欲求にも応えていたことが成熟期の神戸洋家具の最大の特徴である。当時の先進的な神戸洋家具の事業者たちは神戸圏の地域文化の形成において多大な役割を果たし、現代に引き継がれる地域の基盤形成に大きな役割を果たしていた。



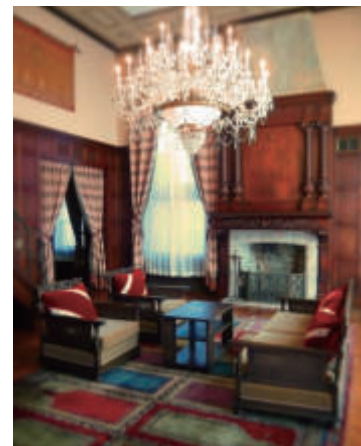
昭和5年頃の日本向きの小型の安楽椅子(筆者蔵 張替有)、昭和8年頃のリクライニングチェア(永田良介商店蔵 張替有)



ジェームス邸の外観と竣工時の現存家具の一部(撮影:筆者 2011)、ダイニングルーム復元時(永田良介商店)



雲仙観光ホテル 外観、戦後のダイニングルーム(現在の状況)、カッボード全体・詳細(撮影:筆者 2003、2008)



乾邸 外観・階段室・マンテルピース彫刻(撮影:筆者 2011 改修事前調査時)、復元後のメインホール(永田良介商店)

4 最後に

神戸洋家具は、地域産業でありながら発祥以来の事業者が早くから「国際的な視野と現実の生活圏の連続性」を保ちながら主体的、能動的に事業を構想してきた自律的な土壌があり、神戸圏の歴史・地理的、文化的な特性が大きく反映された産業である。

今日の神戸洋家具産業の規模や形態は阪神淡路大震災以降、住環境の変化も相まって急速に縮小傾向にある。近年は、近代化遺産として建築物の保存、管理、運営を行う活動に行政や多様な団体が取り組んでおり、活用保存も進展している。また、住宅においては意識の高い個人によって保存活用されている状況もある。

しかし、建築物に比較して保存活用や修復に際して家具や室内装飾が考慮される事例は数少ない。その背景には、竣工時の状況やその後の経歴が不明な場合が多いという理由だけでなく、家具や室内意匠を対象とした研究の蓄積が乏しいため検証ができないばかりかその重要性自体が認識されていないことが原因として考えられる。

開港時の居留地や雑居地で見られたように異なる文化や価値観が交錯・衝突し、さらに融合・共存するような環境が日常

的に存在する情報化社会の今日において、地域文化や精神文化の継承に係る歴史の記録・再評価は重要な課題である。

※ 本稿は、下記の拙稿を要約して構成した。

- 1.『神戸洋家具産業の発祥過程と産業化の特徴 ～開港期から明治中期～』 芸術工学会誌第73号、2017
- 2.『神戸洋家具産業の成長期から変革期までの特徴 ～明治中期から大正期まで～』 芸術工学会誌第73号、2017
- 3.『神戸洋家具産業の成熟期の特徴 ～昭和初期から第二次世界大戦前～』 芸術工学会誌第74号、2017
- 4.『神戸洋家具産業の復興期から競争期までの特徴 ～第二次世界大戦後の昭和期～』 芸術工学会誌第75号、2017